

加害性のなさを基軸とする価値論と資本主義社会の倫理的補完と移行設計

—成果主義を超えて、非加害的社会への静かなパラダイムシフト—

A Value Theory Centered on Non-Harmfulness and the Ethical Completion and Transition of Capitalist Society

— Beyond Meritocracy: A Quiet Paradigm Shift toward a Non-Harmful Society —

成田 浩志

Koji NARITA¹

2025年4月22日

¹ SIP (Security Innovation Project)

現代社会において人間の価値は、成果・能力・生産性といった外的な指標によって評価される傾向が強い。しかしながら、これらの要素は個人の意志のみならず、運、構造的格差、社会的背景など不可視の条件に大きく左右されるため、倫理的に公平な評価軸とは言いがたい。本論文は、こうした現代的課題に対して「加害性のなさ」を人間の価値を測る新たな倫理的基軸として提案するものである。すなわち、何を成し遂げたかではなく、自身を含めた誰かを傷つけず、社会に対して無用な害を与えずに存在できているかという観点から、人間の尊厳と価値を再定義する枠組みを構築する。ただし本提案は、単なる無為無策を肯定するものではない。価値の評価には「その人なりに、人類・社会・隣人などへの貢献に向かおうとする姿勢」を前提条件とし、加害のなさ × 貢献志向という二軸によって倫理的価値を判断する。またこの枠組みは、欲望が社会発展の駆動力となってきた現代資本主義との対立を前提とせず、欲望を否定せずに制御し、重心を愛や共感へと移行させていく設計思想を持つ。さらに本論では、評価軸としての非加害性を社会制度・文化・教育に実装する方法を検討し、従来の成果主義的価値観に依存しない静かで持続可能な社会進化の可能性を示す。倫理的でありながら現実に適応可能なこの提案は、個人の尊厳、社会の調和、発展の持続性を同時に満たす新たな人間観を切り拓くものである。

1. 序論：人間の価値をいかに測るべきか

現代社会において、人間の価値は主として「成果」「能力」「生産性」といった外的な要素によって評価される傾向がある。これは、個人の社会的貢献を可視化し、効率的な分業や評価制度の運用を可能にする点で一定の合理性を有している。しかしながら、こうした価値観は同時に、複数の構造的問題を孕んでいる。

第一に、成果や能力といった評価指標は、当人の努力や意志によってのみ形成されるものではなく、出生環境、時代背景、教育機会、身体的・心理的条件など、個人の統制を超えた要因に大きく依存している。すなわち、これらの指標は必ずしも本人の倫理的価値や人格的成熟を反映するものではなく、偶然的・構造的要素によって大きく左右されるという点において、公平な価値判断の基盤たり得ない。

第二に、成果や達成が過度に重視される社会構造においては、他者や社会に対する加害的影響——たとえば暴力やハラスメント、搾取といった明示的な行為から、無意識的な抑圧、情報の操作、関係性における歪みあるいは自己の優越性を誇示することで他者の尊厳を損なうマウンティングのような行為に至るまで——が、十分に倫理的に評価されないまま見過ごされる場面がある。特に、経済的成功や影響力の獲得が賞賛の対象となる過程では、その背後にある精神的圧迫、関係者への過度な負荷、あるいは社会の持続可能性を損なう行動が相対化されたり、

正当化されたりする傾向がある。このようにして、社会的評価と倫理的価値との間には、しばしば乖離が生じている。

こうした背景を踏まえ、本論文では、人間の倫理的価値を評価するにあたり、従来の成果主義的な評価軸から一定の距離を置き、「加害性のなさ」を新たな基軸として提唱する。この枠組みにおいて重視されるのは、何を成し遂げたかではなく、誰かを不当に傷つけず、社会に対して無用な害を及ぼすことなく存在しているかという点である。

ただし、加害性のなさのみを唯一の評価基準とすることは、倫理的無為を肯定する誤解を招きかねない。そこで本論文では、「その人なりに、人類・社会・隣人への貢献を志向する姿勢」を前提とし、貢献志向と非加害性の両輪によって倫理的価値を構成する枠組みを提案する。

さらに、本研究はこの価値軸を単なる理想論にとどめることなく、現代資本主義社会における欲望による社会発展との緊張関係にも言及する。欲望の完全な否定ではなく、それを制御可能なものとして捉え、加害性を抑制しながら愛や共感を中心とする価値への漸進的移行を設計原理とする。

本論文の目的は、加害性のなさを倫理的評価の中核に据えつつ、現代資本主義社会の価値構造に対する倫理的

補完と、社会制度・文化・教育における移行設計を実装可能なかたちで提示することである。これにより、成果主義に依存しない新たな人間評価の枠組みを提示し、個人の尊厳・社会的調和・持続可能な発展のいずれにも資する価値体系を構築する可能性を検討する。

なお、本研究で加害性のなさを価値基準として提起するにあたっては、それが特定の「清廉な人物像」の称揚を目的とするものではないことを、あらかじめ明確にしておく必要がある。

むしろ本研究は、次のような現実的前提に立脚する。すなわち、多くの人が成長の過程において、意図的あるいは無意識のうちに他者に加害的な影響を及ぼす経験を有しており、さらに人格形成後もその傾向を完全に制御できる例は極めて限られている。

このような現実に基づき、加害性に対して自覚的であろうとする姿勢こそが、倫理的価値評価の基礎となり得るのではないかという問いが、本研究の出発点の一つとなっている。

したがって、本論文において「加害性のなさ」とは、結果としての完全な非加害状態を意味するものではなく、加害的傾向を認識し、それを抑制しようとする倫理的努力の持続的態度をも含意する概念である。

2. 思想的背景と位置づけ

本章では、「加害性のなさ」を人間の価値評価の中核とする本研究の提案を、既存の倫理思想や哲学的枠組みの中に位置づけ、その独自性と射程を明確化することを目的とする。

人間の倫理的価値に関する議論において、加害性の問題は歴史的にも一定の関心を集めてきた。たとえば、仏教における「不殺生（アヒンサー）」の思想は、生命を奪わず、他者に害を与えないことを根本的な徳目として位置づけている。マハトマ・ガンジーはこの非加害の理念を社会運動に応用し、政治的実践の中核に据えた。また、キリスト教的隣人愛やトルストイによる非暴力の倫理観にも、他者への加害を否定する価値観が明確に現れている。

しかしながら、これらの伝統的倫理思想において、「加害性のなさ」が人間の価値そのものを評価する基準軸として体系化されている例は少ない。むしろそれらは、人格形成や理想的徳性の一要素、あるいは神や真理への接近手段として機能してきた。

一方、現代倫理学においては、加害性は功利主義的枠組みの中で「苦痛の最小化」として、また義務論的立場からは「他者の権利の侵害」として理論化されてきた。功利主義は結果に基づく価値判断を、カント的義務論は普遍化可能な行為規範を評価の基準とするが、いずれも「何をしなかったか」「どのように害を避けたか」といった非加害性そのものを評価軸の中心に据える立場ではない。

また、現代における構造的加害や制度的暴力の議論においては、個人が無意識に加担する加害性の可視化が進んできた。たとえば、ジェンダー、階級、人種、障害などをめぐる社会理論では、直接的な行為のみならず、構

造の中で再生産される加害性への自覚と責任が問われるようになってきている。しかしながら、これらの議論もまた、「加害に加担していないこと」それ自体を個人の倫理的価値の基軸とする体系的評価枠組みへとは発展していない。

本研究の提案は、このような既存の理論的伝統と接続しながらも、それらを明確に超える次の三つの特徴を有する。

第一に、本研究では加害性のなさを、倫理的理想や規範としてではなく、人間の価値を測る評価軸として中心に据える点で、評価論的性格を持つ。この点において、功利主義的成果評価とも、徳倫理的内面重視とも異なる位置をとる。

第二に、本提案は「完全な非加害性」ではなく、加害の可能性に対する自覚と抑制の努力という過程的要素を含意するため、可視的な成果よりも姿勢や志向性を重視する。これは、評価の基準として誰にでも開かれた公平性を担保するものである。

第三に、本研究は倫理理論にとどまらず、資本主義的欲望構造との共存可能性を前提にしており、社会制度との接続性を重視する点で、現実的倫理設計を志向する。これは従来の理想主義的倫理モデルに対する一種の実装可能性の補完でもある。

以上のように、本研究は伝統的な非加害の倫理観、現代の構造的加害批判、功利主義・義務論・徳倫理といった主要な倫理理論と親和性を持ちつつ、それらと明確に異なる独自の評価軸を提示する試みである。

次章では、「加害性のなさ」を評価軸とする枠組みの内部構造を掘り下げ、成果主義的価値観との対比のもとに本提案の理論的基盤を明確化する。

3. 実践モデルと分析

本章では、人間の倫理的価値を測る基準として「加害性のなさ」を中核に据えるという本研究の提案を理論的に明確化し、従来の成果主義的価値観との対比を通じて、その意義と評価可能性を検討する。

現代社会における人間評価は、一般に「成果」「影響力」「能力」「役職」「収入」といった外在的な指標を基盤として構築されている。これらは一見して可視化しやすく、組織運営や政策設計において実用性をもつ。しかしながら前章でも述べた通り、こうした指標は個人の倫理的価値とは必ずしも一致しない。なぜならそれらは、偶然的な要因一出生環境、教育機会、身体的・認知的条件、さらには社会構造的な優遇や抑圧に強く依存しており、本人の倫理的判断や人格の成熟とは独立した変数として作用するためである。

さらに、成果や影響力の追求は、ときに他者への犠牲、精神的・制度的圧迫、構造的排除を伴う。こうした事例においては、「何を成し遂げたか」だけを基準とする評価は、むしろ倫理的に疑問を呈するものである可能性が

ある。したがって、人間の価値を構成する要素として、「他者や社会への加害をいかに回避しようとしたか」という観点が重視されるべきであると考えられる。

ここで本研究が提案するのが、「加害性のなさ」を評価の中核に据える枠組みである。ただし、「加害性のなさ」とは、絶対的・静的な「無加害状態」を意味するのではない。むしろここでの「加害性のなさ」とは、加害の有無だけでなく、加害的傾向や構造的影響を認識し、それを抑制・回避しようとする持続的な倫理的努力を評価対象とするものである。この定義においては、完全無欠な人格像や聖人的行動を前提とするものではなく、むしろ不完全な存在としての人間が、自らの加害性を見つめ、抑制しようとする過程にこそ価値を認めるものである。

このような枠組みは、倫理的価値評価の普遍性と開放性を担保する利点をもつ。すなわち、社会的成果や影響力の大小によらず、また能力の先天的条件や社会的地位にかかわらず、誰もが倫理的価値を有しうる評価基準として機能し得る。またそれは、社会的弱者や周縁化された個人の存在価値を再定義する視座ともなり、既存の価値階層の見直しを促す理論的契機ともなりうる。

さらにこの枠組みは、「評価の可視性」という観点においても一定の応用可能性を有している。加害性は、他者への直接的行為のみならず、言動、態度、関係構築のあり方、構造的選択等を通じて現れる。これらは完全に客観化することは困難ではあるものの、観察可能な行動傾向や自己開示、倫理的判断の文脈からある程度の評価は可能である。特に、自己の加害可能性に対する自覚の有無や、それに基づいた行動の選択は、倫理的対話や教育の現場において具体的な評価項目とすることが可能である。

したがって本章で提案されるのは、「何を達成したか」という成果指標に代えて、「どれだけ傷つけなかったか」「どれだけ抑制しようとしたか」という観点を倫理的価値の測定軸とする転換である。それは単なる逆転ではなく、倫理評価の可変性・関係性・状況依存性を認めながらも、持続可能かつ包摂的な社会の形成を可能にする方向性を提示するものである。

次章では、この「加害性のなさ」を評価の軸とする枠組みをより実践的に支えるもう一つの要素—「その人なりに社会や他者に貢献しようとする志向性」について検討し、非加害性と貢献志向の両輪による倫理的評価構造を明示する。

4. 貢献志向と非加害性の両輪

前章において、「加害性のなさ」を人間の倫理的価値評価の中核に据えるという枠組みを提示した。しかしながら、加害を避けるという行動が、倫理的無為や消極的姿勢と誤解される可能性があることは否めない。本章では、こうした懸念に応答する形で、「加害性のなさ」と並ぶもう一つの評価要素としての貢献志向（contributinal orientation）の必要性を論じ、両者の関係性を理論的に整理する。

人間の価値を「何を成し遂げたか」ではなく「どれだけ加害しなかったか」によって測ろうとする場合、その評価軸が消極的・否定的な性格を持つという印象は否定できない。たしかに、社会的加害の回避は倫理的価値の重要な側面であるが、それだけでは倫理の積極的側面—すなわち、他者や社会に対して貢献しようとする姿勢や実践—が軽視されかねない。したがって、本研究が提案する価値評価の枠組みは、「非加害性」と「貢献志向」の二重構造によって成立するものである。

ここでいう「貢献志向」とは、可視的な社会的成果や評価されやすい業績を指すのではなく、その人なりの仕方—人間・社会・隣人に対して関わり、貢献しようとする倫理的志向性を意味する。この概念は、「善の意志」や「向社会性」などの語で表現されることもあるが、本研究においては、成果主義から距離を置いた“姿勢としての貢献”に焦点を当てている。

このような志向性は、しばしば結果によって評価されにくい。たとえば、支援を望んで行動したにもかかわらず相手に受け取られなかった場合や、社会構造や障壁によって貢献が実現されなかった場合にも、そこに向かおうとした姿勢には倫理的価値が宿ると考える。この立場は、個人の努力と成果を峻別し、「できる範囲での志向的行動」に着目する点で、偶然性や社会的条件の影響を受けにくい評価軸として機能する。

他方で、「貢献志向」単独では、善意に基づく加害（例：過剰な介入、同調圧力、援助の押し付け等）を正当化しかねない危険も孕む。ここで「加害性のなさ」という評価軸が重要な補完要素として機能する。たとえ貢献を志向していたとしても、他者の尊厳を侵害し、持続的な害を生むような行動は、倫理的価値を構成し得ない。この点において、非加害性は貢献志向の“フィルター”として機能し、価値判断における暴走や誤認を防ぐ装置として理論的に位置づけられる。

ゆえに、本研究における人間価値評価の構造は、単なる「非加害者の称揚」でもなければ、「成果なき善意の美化」でもない。“貢献しようとする志向”と“加害を抑制する努力”の交差点に生まれる倫理的姿勢を評価する枠組みである。これは、道徳的態度としての中庸を指向するものであり、倫理的行為が「過度でも不足でもなく、調和的であること」に価値を見出す伝統（たとえばアリストテレスのメソテース論）とも、部分的に呼応する構造をもつ。

このような両輪構造を前提とすれば、従来の成果主義的・功利的価値観に基づく評価体系とは異なる、より包摂的で現実に即した倫理的評価の枠組みが構築可能となる。次章では、このような倫理的価値評価を、資本主義的欲望構造の中にいかに位置づけ、調和させようかという実装的課題に焦点を当てる。

5. 資本主義と欲望：加害と発展のジレンマ

前章において、倫理的価値評価の二つの軸—貢献志向と加害性のなさ—を提示した。本章では、それらを現代社会の支配的構造である資本主義的欲望システムと接続し、その緊張関係と調和可能性について考察する。

現代の資本主義社会は、根本的には個人の欲望に基づいて構築されている。生産・流通・消費のいずれにおいても、需要の創出と欲望の刺激は、経済活動の循環を維持・拡大するための主要な駆動力である。このような構造においては、利潤の最大化や影響力の獲得といった目標が制度的に正当化されており、これらに向かう行動が社会的成功とみなされやすい。

しかし、欲望が社会的推進力として機能する一方で、それが加害性と結びつくリスクもまた制度的に内包されている。競争的環境における成果至上主義、リソース獲得のための他者排除、広告・情報操作による認知の歪曲、さらには労働搾取や環境負荷といった構造的加害は、いずれも欲望が制御を欠いたときに生じる典型的現象である。

ここにおいて本研究が提起する価値軸—加害性のなさ—と貢献志向の両立—は、資本主義の運動原理と一定の緊張関係を持たざるを得ない。すなわち、倫理的価値の構築と市場的成功の獲得とが、必ずしも一致しないという構造的矛盾が存在する。しかしながら本研究は、資本主義の全否定を志向するものではなく、既存の価値体系に対する倫理的補完と調和的再設計を目指す立場に立つ。単純な資本主義批判にとどまらず、「資本主義もまた偉大な人類の歩みの一つ」と位置づけた上で、より現実的な問いを設定する。それは、加害性を抑制しつつ、欲望がもたらす創造性や社会的活力をいかに調和的に活かすのか、という実装的課題である。

筆者は、欲望そのものを倫理的に否定するのではなく、それを制御可能な対象と捉える立場を取る。すなわち、欲望に基づく行動が他者への加害や社会の持続可能性の毀損を引き起こさないよう、価値判断のフィルターとしての倫理的評価軸を導入する必要があると考える。これは、貢献志向に対する加害性のフィルタリングという、前章で示した両輪構造の延長上にある実践的モデルである。

このような調整可能性は、すでに一部の制度領域において萌芽的に見られる。たとえば、ESG（環境・社会・ガバナンス）投資、倫理的消費、ウェルビーイング経済、人的資本経営といった枠組みは、単なる利益追求を超えて、持続可能性と倫理的正当性を価値に組み込もうとする試みである。これらの制度は、欲望を活用しながらも、評価軸に加害の抑制と社会的貢献を取り入れる点で、本研究の枠組みと接続可能な構造を有している。

ただし、それらが実質的に機能するためには、評価の基準が結果主義的な数値指標だけではなく、行動の姿勢や加害性に対する自覚と回避努力といった倫理的プロセスに基づくものである必要がある。形式的なコンプライアンス遵守や、外部評価に基づく「見せかけの倫理」が蔓延する限り、欲望と倫理の調和は持続しない。

したがって、本研究が提案する倫理評価モデルは、資本主義構造に対する「反対」ではなく、既存の成果主義的価値観を補完し、倫理的観点からその機能を調律・強化する設計論である。欲望を否定するのではなく、倫理のフィルターを通過した欲望の発露を評価し、加害性の

少ないかたちでの創造と貢献を可能とする社会モデルの設計である。従って、成果と倫理、欲望と配慮の両立を可能にする調和的な社会設計の一環として理解されるべきである。

次章では、こうした倫理評価モデルを社会制度に実装するための原則とアプローチについて論じ、非加害性に基づく価値観がいかに教育、文化、組織構造において制度化されるかを考察する。

6. 倫理的移行の設計：重心を「欲」から「愛」へ

前章において、本研究の倫理評価モデルが現代資本主義の欲望構造といかなる緊張関係を持ち、それをいかに調和的に乗り越えるかを検討した。本章では、その延長として、社会全体の倫理的重心を「欲」から「愛」へと漸進的に移行させるための設計原則と実装戦略について論じる。

ここで用いる「欲」と「愛」という語は、心理的概念というよりも、社会的動機形成の二つの軸として機能する。すなわち、「欲」は自己利益の獲得を動機とする社会行動の原理であり、「愛」は他者・共同体・未来世代・そして自己への配慮と共鳴を動機とする原理である。現代の多くの制度設計は「欲」を前提として構築されており、その駆動力は経済的には極めて高い。一方で「愛」に基づく社会行動は、長期的な関係性の維持、文化の涵養、共同体的安定といった非可視的な利益に資するが、即時的な成果にはつながりにくく、制度的には周縁化されやすい。

本研究が提案する倫理的評価軸は、こうした「愛」に基づく行動原理を、倫理的な価値評価と社会的認知において可視化・制度化することによって、社会の重心を徐々に移動させることを志向している。その目的は、欲望の駆動力を排除するのではなく、それを愛と共鳴可能な方向に調律し、加害性のない貢献行動へと変容させる構造を社会の中に埋め込むことである。

このような移行設計は、一挙的な変革によってなされるものではなく、以下の三つの原則に基づく漸進的かつ分散的な倫理的移行として構想される。

6-1. 原則1 意識と評価の非同期性を認めること

社会の倫理的転換は、人々の内面的自覚の変化（意識）と、制度による評価基準の変化（構造）の間に時間差を持つのが常である。先に制度や評価軸を整備することで、人々の行動が間接的に変容し、その後倫理的自覚が追いつくという順序も多い。

したがって、「加害性のなさ」と「貢献志向」を評価する制度や文化的コードを先行的に導入し、意識変容を後から誘導するような設計が有効である。たとえば、非加害的な行動や態度に対する可視的承認、倫理的選択を行った人物への評価制度の整備などがこれに該当する。

6-2. 原則2 倫理的選好の選択可能性を確保すること

倫理的行動を社会的に評価するにあたって、強制的な道德化は反発や偽善を生む危険がある。したがって、「加害性のなさ」や「貢献志向」を評価基準として提示

しながらも、それらを選択肢として提示することで、倫理的選好の自由領域を確保する必要がある。

この点で重要なのは、「評価される＝強制される」という短絡を避ける設計である。評価軸の提示は、あくまで社会が何を重視するかの方針として可視化されるものであり、それが価値の多様性を否定するものであってはならない。

6-3. 原則 3 制度・文化・教育の三層における反復の実装

重心の移行は、一つの制度設計だけで完結するものではなく、制度（制度的評価軸）・文化（共有価値観）・教育（育成過程）という三層において、繰り返す回帰する実装が必要である。

たとえば、教育においては「何を成し遂げたか」よりも、「どのように他者や社会に貢献しようとしたか」「どのように加害性を認識し、それを回避しようとしたか」といった、志向性と倫理性に基づく評価枠組みを導入することで、価値観の形成過程に早期から関与することができる。文化においては、物語、表彰、芸術表現を通じて、非加害的存在への共感と認知を広めていくことが可能である。制度においては、評価指標や報酬体系の見直しによって、具体的な社会的インセンティブを形成する。

6-4. 小括 非加害性による重心移行の社会設計

本章で提示したのは、欲望を原動力とした社会構造の中で、加害性のなさや貢献志向という倫理的評価軸を導入し、それを通じて社会全体の動機形成の重心を「愛」へとシフトさせるための設計思想である。それは、暴力的な倫理改革ではなく、選択肢の提供と評価構造の転換による、静かなパラダイムシフトとして構想されている。

次章では、この倫理評価モデルの批判的検討を行い、想定される反論に対して応答することで、理論的強度と適用可能性を補強する。

7. 批判と応答

本章では、「加害性のなさ」と「貢献志向」の二軸によって人間の倫理的価値を再定義しようとする本研究の提案に対して想定される批判的論点を整理し、それぞれに対する応答を通じて理論的な強靱性と実装可能性を補強する。

7-1. 批判1 評価が主観的すぎるのではないかと

問題提起

加害性や貢献志向のような倫理的要素は、成果や数値と異なり、評価が主観に依存する恐れがある。特に「加害性のなさ」は、意図・文脈・認知のずれといった要因により、評価基準が不安定になるのではないかと。

応答

本提案における評価対象は、結果としての「無加害」ではなく、加害性を認識し、それを抑制しようとする「倫理的努力」である。この視点においては、評価の絶対的客観性よりも、本人の内的判断と外的関係性の整合性が重視される。

また、現実の人事評価・教育・司法判断においても、誠実性・反省・協調性といった定量化困難な要素は評価に組み込まれており、定性的指標を制度的に扱う知見と実践は既に存在している。したがって、倫理的姿勢に関する評価もまた適切な訓練と手続によって制度化可能である。

7-2. 批判2 「何もしない人」が高く評価されてしまうのではないかと

問題提起

加害性のなさを価値とするならば、極端な例として「社会的に関与しないこと」や「他者と関わらないこと」が推奨されるのではないかと。つまり、消極的で無為な姿勢が倫理的に称揚される可能性がある。

応答

本研究における評価基準は、加害性のなさ「だけ」ではなく、「貢献志向」との両輪によって構成される。ここでの貢献志向とは、「その人なりに、できる範囲で、他者・社会に関わろうとする姿勢」を意味しており、消極的無為を倫理的に正当化する立場とは根本的に異なる。

したがって、評価の前提として「貢献の意思」が存在することが不可欠であり、「傷つけずに存在するだけで評価される」という単純な無加害主義ではない。非加害性を支える努力と、貢献に向かう意思との交差点に価値を見出すことが本提案の骨格である。

7-3. 批判3 善意の押し付けや過剰介入をどう防ぐのか

問題提起

貢献しようとする意志が評価されるならば、結果的に「善意による加害」や「過干渉・支配的な援助」が正当化される恐れがあるのではないかと。

応答

この点こそが、「貢献志向」と「加害性のなさ」の両輪構造が不可分である理由である。すなわち、いかに善意であっても、それが他者に対して加害的に作用する場合には、倫理的価値を構成し得ない。加害の抑制は、単に加害の意思を持たないことではなく、「相手の尊厳、ニーズ、文脈を理解しようとする倫理的感受性」によって達成される。

本提案における貢献志向とは、自己の欲求を投影することではなく、他者との関係性のなかで調整される方向性であり、加害性のフィルターを通して評価される。

7-4. 批判4 社会発展を妨げるのではないかと

問題提起

成果ではなく非加害性に価値を置く社会は、イノベーションや競争、発展を抑制し、停滞した状態に陥るのではないかと。

応答

本研究は欲望や成果を否定するものではない。むしろ、欲望の駆動力を倫理のフィルターを通して制御することによって、持続可能かつ非加害的な発展を可能とすることを目的としている。

これは、「競争か倫理か」という二項対立ではなく、「倫理的に調整された競争」を構想する立場である。非

加害性と貢献志向の評価軸を導入することで、加害を伴わない創造性や、他者と協働するかたちでの社会的成果の実現が促進される。

実際に ESG 投資、ウェルビーイング経済、人的資本経営といった分野では、倫理性と成果を両立させる評価基準が制度化されつつある。

7-5. 小括：制度的反論への応答とモデルの強化

本章で検討した通り、想定される批判はいずれも重要な論点を含んでいるが、本提案の二軸モデル（加害性のなさ × 貢献志向）は、それらの懸念を内在的に克服し得る構造を備えている。

本研究の理論的強度は、

- 倫理理論としての明確な原則と定義、
- 成果主義や功利主義との整合的な差異化、
- 実装可能性と制度的応用の展望、
- そして反論への応答能力

の4点において確認される。

次章では、これまでの議論を総括し、今後の倫理設計・制度構築への応用可能性と、本研究の思想的意義を結論として提示する。

8. 結論と今後の展望

本研究は、人間の倫理的価値を評価する新たな枠組みとして、「加害性のなさ」と「貢献志向」という二軸を提起し、現代社会における成果主義的価値観の見直しと、倫理的評価軸の再構成を試みたものである。

8-1. 本研究の理論的貢献

第一に、現代社会において支配的な「成果」「能力」「影響力」といった評価軸は、偶然的な構造条件や先天的資源に強く依存し、倫理的姿勢や関係性への配慮といった要素を評価から排除する傾向にある。本研究はこうした評価構造に対して、「加害性のなさ」——すなわち他者や社会に対する不必要な傷つけの回避——を価値基準とする立場を提示し、人間の価値を倫理的視点から捉え直す方法を提案した。

第二に、この枠組みが単なる非加害主義に陥らないよう、「その人なりに社会や他者に貢献しようとする志向性（貢献志向）」をあわせて評価軸とし、倫理的な無為や消極性を排除した点に独自性がある。これにより、「何を成し遂げたか」に代わり、「どのように加害を避けつつ、他者に関わろうとしたか」が価値の基準となる、新たな倫理的評価構造が成立する。

第三に、この二軸構造を単なる理想論にとどめず、資本主義的欲望構造の中での調和可能性を探りながら、「欲」から「愛」への倫理的重心の移行を設計思想として提示した。社会的欲望の駆動力を否定せずに制御し、非加害的かつ貢献的な社会関与を可能にする構造的変容の道筋を論理的に示したことは、本研究の制度設計論的意義である。

8-2. 応用可能性と派生的発展

本研究で提示した倫理的評価モデルは、以下のような実践領域において応用可能である。

● 教育領域

人格形成の初期段階から、「成果」ではなく「関係性への配慮」や「他者の尊厳への意識」を基軸とする倫理的評価枠組みの導入が可能である。

● 組織運営や人事評価

配慮力・抑制力・協調性といった非加害的行動の可視化と評価制度への反映が、持続可能な組織文化の形成に寄与する。

● 福祉・ケア・セキュリティ分野

「守る」と「支配する」を峻別する倫理的枠組みとして、対人援助の実践基盤を支える理論として位置づけられる。

● ESG 経営やウェルビーイング経済

倫理性と経済性の接続軸として、人的資本の非加害的貢献価値を定量・定性の両側面であらう際の補助概念として機能しうる。

さらに、本研究で提案した評価構造は、筆者が別途執筆した実践的研究「愛情と信頼を基盤とした持続可能な相互扶助コミュニティの形成」において具体化されている。そこでは、加害を避けつつも関わり合おうとする姿勢が、コミュニティ内における信頼と助け合いの文化を自然に誘発する仕組みとして設計されている。両論は形式こそ異なるが、非加害的な関与こそが社会的持続性の基盤となるという思想において、深い共通性を有している。

8-3. 思想的意義と終章の所感

本研究の出発点には、筆者自身が防犯・セキュリティの実務領域で接してきた、人と人のあいだに生じる多様な加害のかたち——それが明示的であれ、構造的であれ——への実感がある。制度上は「何も起きていない」とされる日常の中でも、暴力的な言動、配慮なき言葉、過剰な正義、あるいは沈黙という関係性の構造が、誰かを確かに傷つけている。そうした現場で、筆者が何よりも求めてきたのは、誰もが安心して存在し、関わることができる社会的構造の形成であった。

そのためには、「強さ」の定義が変わらなければならない。声を張り上げることでも、成果を競うことでもなく、他者を傷つけずに関わろうとする姿勢——静かで、しかし確固たる強さをもって社会に参与すること。そのような在り方が、成果以上に評価される社会でなければ、真の意味での共生も、持続可能な社会の構築も成立し得ない。

本研究は、そうした思索と実践の交差点から生まれた、小さな問いかけである。

「他者を傷つけずに存在することには、価値があるのではないか」という、根源的でありながら見過ごされてきた問いへの、ひとつの応答である。そしてその問いは、個人の倫理姿勢にとどまらず、社会制度のあり方そのものを静かに補完・再設計する可能性を内包している。

参考文献

- [1] Michael Sandel (2012). What Money Can't Buy: The Moral Limits of Markets.
- [2] Michael Sandel (2020). The Tyranny of Merit: What's Become of the Common Good?
- [3] Iris Marion Young (1990). Justice and the Politics of Difference.
- [4] Martha Nussbaum (2006). Frontiers of Justice.
- [5] 成田こうじ (2024) 『愛情と信頼を基盤とした持続可能な相互扶助コミュニティの形成』